

書籍紹介

『失われてゆく、我々の内なる細菌』

マーティン・J・ブレイザー 著

山本太郎 訳 みすず書房 2015年

19世紀に始まる細菌学によって、人類は微生物が病原になりうることを知った。そしてカビに殺菌力が見出される。抗生物質の発見である。以来この薬は無数の命を救う一方、「念のため」「一応」と過剰使用されてきた。これは、抗生物質は仮に治療に役立たなくても「害」は及ぼさない、という前提に基づいている。しかし、それが間違いだとしたらどうなのか――。

人体にはヒト細胞の3倍以上に相当する100兆個もの細菌が常在している。つまり我々を構成する細胞の70-90%がヒトに由来しない。こうした細菌は地球上の微生物の無作為集合体ではなく、ヒトと共進化してきた独自の群れであり、我々の生存に不可欠だ。構成は3歳くらいまでにはほぼ決まり、指紋のように個々人で異なる。その最も重要な役割は先天性、後天性に次ぐ第三の免疫である。しかしこの〈我々の内なる細菌〉は抗生剤の導入以来、攪乱され続けてきた。帝王切開も、母親から細菌を受け継ぐ機会を奪う。その結果生じる健康問題や、薬剤耐性がもたらす「害」の深刻さに、我々は今ようやく気づきつつある。

マイクロバイオーーム研究の第一人者である著者は、この問題に対して実証的に警鐘を鳴らすとともに、興奮に満ちた実験生活、忘れがたい症例や自身の腸チフス感染などを

通じて、興味深い複雑なマイクロバイオーームへの理解を一気に深めてくれる。その案内人とも言えるのがピロリ菌だ。19世紀にはほぼ全ての人の胃にありながら、21世紀の今は消えつつある。そのピロリ菌の本態に迫ることは、マイクロバイオーーム全貌解明への指標となりうるかもしれない。(内容紹介より)

●主な目次

- 第1章 現代の疫病
- 第2章 微生物の惑星
- 第3章 ヒトのマイクロバイオーーム
- 第4章 病原体の出現
- 第5章 驚異の薬
- 第6章 抗生物質の過剰使用
- 第7章 現代の農夫たち
- 第8章 母と子
- 第9章 忘れられた世界
- 第10章 胸焼け
- 第11章 呼吸困難
- 第12章 より高く
- 第13章 ……そしてより太く
- 第14章 現代の疫病を再考する
- 第15章 抗生物質の冬
- 第16章 解決策
- エピローグ